様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月１６日現在

機関番号：３４３０２
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２００２０
研究課題名（和文）　社会心理統合過程における「国家社会主義」の再検証

研究課題名（英文）　Reconsideration of the State Socialism in Japan in the interwar period

研究代表者
福家　崇洋（FUKE TAKAHIRO）
京都外国語大学・外国語学部・非常勤講師
研究者番号：８０４４９５０３

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は、大正期の「民主化」や総力戦体制前夜の社会思想、社会運動を検証することで、既存の社会思想史研究や総力戦体制研究に問題提起をおこなうことであった。本研究では、ファシズムの一翼と考えられてきた戦間期日本の国家社会主義に焦点をあて、先行研究の資料的基盤を抜本的に塗り替え、同時期の社会思想史、社会運動史に位置づけなおし、戦間期日本の歴史に新たな視覚を提起した。上記の研究成果は、論文４本・図書２冊にまとめられた。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study was to submit some proposals to the existing studies in the History of Social Thought and research of Total war system. Focusing on the State Socialism in Japan in the interwar period, which has been thought of as fascism, this study re-evaluated it in relation to the contemporary history of social thought and that of social movements. The historical records in this field were also updated. As a result of this study, 4 papers and 2 books were published.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成２０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
平成２１年度	1,700,000	510,000	2,210,000
平成２２年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：国家社会主義、日本主義、高畠素之、社会心理 、共同体、ナチズム、戦間期、大正デモクラシー

１．研究開始当初の背景

研究開始当初の学問的背景として、２つの大きな仮説があった。大正デモクラシー研究と総力戦体制研究である。前者に関する代表的文献は、松尾尊兊『大正デモクラシーの研究』（１９６６年）、三谷太一郎『大正デモクラシー論』（１９７４年）などである。

それらの主張を最大公約数的にまとめれば、大正期（１９１２～２６年）に進展した「民主化」の傾向が「ファシズム」期に至り頓挫し、それにかわる国家主義・帝国主義をイデオロギーとする強権的体制が成立し、国民を済し崩し的に総動員体制へと組み込んでいったというものである。

しかし、近年では、総力戦体制研究の進展によって、大正デモクラシー研究に異議が呈

されている。その代表的な文献は、山之内靖編『総力戦と現代化』（１９９５年)、山之内靖『システム社会の現代的位相』（１９９６年)、雨宮昭一『戦時戦後体制論』（１９９７年）などである。

同研究を牽引する山之内氏は、総力戦体制が「強制的均質化」によって社会的紛争や排除を除去し、社会総体を戦争遂行のための機能性に向けて合理化したこと、また戦争国家への移行が不可避な社会変革を伴ったのみならず、戦後の民主主義体制と「福祉国家」とも連続するとして、大正デモクラシー研究が前提としてきた「戦時」と「戦後」の断絶に対して問題提起をおこなった。

しかし、同研究では、１９３０年代後半を主対象とするため、「大正デモクラシー」の根幹というべき大正期の「民主化」や総力戦体制前夜の右派社会思想・社会運動への検証はほとんどされておらず、「戦前」と「戦時」との関係をどのように考えるかは未解決の問題として残されていた。

２．研究の目的

以上の研究開始当初の背景をおさえたうえで、本研究は、大正期の「民主化」や総力戦体制前夜の社会思想、社会運動への検証をおこない、総力戦体制研究に問題提起することを目的とした。

とくに、１９３０年代初期日本で次第に拡大・強化していく国家権力の統制が政治・経済領域にくわえ、人間の「社会心理」にまで及ぼされようとしていたことに注目し、この心理統制からの解放の契機を明らかにするという視点で、１９１０年代から３０年代初頭までの思想を検討した。本研究が主な対象とした思想は国家社会主義である。

３．研究の方法

以上の研究目的のもと、国家社会主義思想及び運動を主対象とする本研究は、３年間のなかで、以下の点を新たに明らかにしようとした。

（１）国家社会主義運動が、当時の社会心理学、精神分析学の受容・摂取から、「大衆」の「社会心理」「本能」などに着目し、社会変革のみならず、人間の「合理化」「機械化」の変革を視野に入れて運動に取り組んでいたという新たな側面。

（２）人間の「社会心理」「本能」への着目からの変革と国家の本質を「統制」にみる国家社会主義独自の国家観構築が、１９２０年代末以降の「日本主義」「天皇主義」の浸透のなかで、どのような抵抗線を築くことになったか、またなぜ国家社会主義の抵抗は成功することなく、挫折におわったかの検証。これは、国家社会主義運動研究のみならず、１９３０年代半ば以降しか対象としない総動員体制研究をも根本的に塗り替えることになる。

（３）国家社会主義運動がイタリア・ファシズム、ナチズムを先駆的に受容・紹介していく過程で、同運動がそれらから「国家メカニズム」や人間の「機械化」を解体させる視点、「国家」を「機関」視する視点を引き出そうとしていたという新たな側面。これは近代日本の社会思想史における一国史的視点を相対化させるのみならず、日独及び日伊交流史にも新たな知見と仮説を提供する。

以上の検証のために、本研究の方法として、国内外における近代日本における国家社会主義、社会主義・共産主義、日本主義関係の各文献の収集と聞き取り調査を実施したうえで、収集文献をデータ・ベース化して一般公開すること、論文として研究成果を発表・還元することを目指した。

４．研究成果

（１） 国内外機関所蔵資料の収集

国内では国会図書館憲政資料室、法政大学大原社会問題研究所、同志社大学人文科学研究所、京都大学人文科学研究所、エル・ライブラリーなどで戦間期日本の国家社会主義、日本主義関係の資料を閲覧、複写した。

国外では、アメリカ国立公文書館、ロシア国立社会政治史アルヒーフで、日本の国家社会主義、日本主義、共産主義の各関係資料を閲覧・複写した。

（２） 関係者へのヒアリング

１９２０年代末以降の国家社会主義運動で活躍する石川準十郎、山内一男（筆名別府峻介）関係者と、１９３０年代初頭に社会民衆党から国家社会主義運動へ移る松下芳男関係者にヒアリングと資料調査をおこない、新たな知見を得た。前者資料は後述の論文、図書に引用、収録し、後者資料は国会図書館憲政資料室に移管され、現在公開されている。

（３） データ・ベースの作成・公開

上記（１)、（２）で蒐集した資料の整理およびデータ入力を進め、現在ホームページ（ＵＲＬは下記参照）にその成果を公開した。

（４） 成果の公表

上記の資料収集の成果を踏まえて、同志社大学人文科学研究所の研究会などで発表したのち、以下の成果（論文４本と図書２冊）を発表・刊行した。①「山元亀次郎関係資料」（『文明構造論』)、②「１９３０年代初期日本における国家社会主義・日本主義論争―「社会心理」の行方と「天皇政治」をめぐっ

て―」(『キリスト教社会問題研究』)を発表した。③「１９３０年代初期日本における国家社会主義運動 ――そのナチ党論と「ファシズム」論に焦点をあてて」(『史学雑誌』)、④『戦間期日本の社会思想――「超国家」へのフロンティア』(発行所人文書院)、⑤「大正デモクラシー下の心理改造―――一九一〇年代における木村久一の軌跡と思想」(『社会思想史研究』)、⑥『満川亀太郎日記』(共編著、発行所論創社)。

（５） 新たな知見

①では１９３０年代初期に社会民衆党から国家社会主義運動へと移る山元の関係者にヒアリングと資料調査を済ませていたので、今年度に国家社会主義運動関係の写真や資料を資料目録と解題を付してはじめて公開した。

②資料収集や予想外のヒアリング成果を早急に公表するため、１９３０年代初期日本における石川準十郎の思想と軌跡を当時の社会思想史にはじめて位置付け、日本主義に対峙する国家社会主義の新たな側面を明らかにした。

以上の①②によって国家社会主義関係の埋もれた貴重な資料の一端をはじめて世に出すことができたうえ、「研究の方法」で書いた明らかにすべき点のうち、（１）（２）を明らかにできた。

③では１９３０年代初期の国家社会主義運動がナチズムの日本への導入に先駆的かつ重要な役割を果たしていたこと、同運動がナチズムの批判的分析を通して日本主義や来るべき総力戦体制への批判的視座を築こうとしていたことを明らかにした。この③によって、「研究の方法」で書いた明らかにすべき点のうち（３）を明らかにできた。

④ではこれまで発表してきた国家社会主義関連の論文、資料紹介などを著書として再構成し、戦間期における国家社会主義の思想的営為を根本的に描きなおすとともに、同時代の社会思想史にはじめて位置付け、共産主義と距離を取りつつも、日本主義と総力戦体制に対峙する国家社会主義の新たな側面を明らかにし、総力戦体制研究に問題提起をおこなった。この④により、「研究の方法」で書いた明らかにすべき点のうち（１）（２）（３）のすべてを図書として再構成して発表することができた。

⑤では、本研究のテーマのひとつである戦間期日本の社会変革における人間心理の行方を、木村久一という人物の軌跡と思想に焦点をあてながら考察し、彼が大正デモクラシー期に国民道徳論に代わる国家を超えた道徳を構築しようとし、すでにこの時期から心理統制からの解放を築こうとしていたことをはじめて明らかにした。これにより、木村に注目してこなかった大正デモクラシー研究や総力戦体制研究に問題提起をおこなった。

⑥では、１９３０年代初頭に国家社会主義運動に関わった満川の日記を翻刻・編纂・刊行した。１９３０年代初頭における国家社会主義政党「新日本国民同盟」の幹部である満川の日記は、当時の国家社会主義運動を内側からとらえ直すうえで貴重な資料であり、翻刻できた意義は大きいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 福家崇洋「大正デモクラシー下の心理改造　1910 年代における木村久一の軌跡と思想」『社会思想史研究』、社会思想史学会、第 34 号、122- 140 頁、2010 年、査読有。

② 福家崇洋「1930 年代初期日本における国家社会主義運動　そのナチ党論と「ファシズム」論に焦点あてて」『史学雑誌』、史学会、第 118 巻 8 号、63-86 頁、2009 年、査読有。

③ 福家崇洋「1930 年代初期日本における国家社会主義・日本主義論争　「社会心理」の行方と「天皇政治」をめぐって」『キリスト教社会問題研究』、同志社大学人文科学研究所、第 57 号、93－122 頁、2008 年、査読有。

④ 福家崇洋「山元亀次郎関係資料」『文明構造論』、第 4 号、1-32 頁、2008 年、査読有。

〔図書〕（計２件）

① 福家崇洋『戦間期日本の社会思想　「超国家」へのフロンティア』、人文書院、2010 年、478 頁。

② 長谷川雄一、C・W・A・スピルマン、福家崇洋編『満川亀太郎日記　大正八年 - 昭和十一年』、論創社、2010 年、324 頁。

〔その他〕

ホームページ等

https://sites.google.com/site/archivesforsocialmovements/

６．研究組織

(1)研究代表者

福家　崇洋（FUKE　TAKAHIRO）
京都外国語大学・外国語学部・非常勤講師
研究者番号：80449503

(2)研究分担者

該当なし。

(3)連携研究者

該当なし。